

稲賀繁美

Word and Image 学会にいたるアンヌ＝マリー・クリスタンの若干の追憶

—あとがきにかえて

個人的な追憶に終始することを、冒頭にお断りする。また「あとがき」としては、いささかならず場違いな体裁となることを、お赦し頂きたい。はや三五年前の出来事である。

*

一九八一年にフランス政府給費留学生としてパリ第一大学に留学した。指導教員はジャン・ロード。クロード・レヴィ＝ストロースら文化人類学者の周辺にいた人物であり、イヴ・ボンヌフォアとも友人で詩人としても知られていた。二十世紀初期の欧州前衛美術とアフリカ藝術との関係を洗い出した浩瀚な博士論文が話題を呼んでいた。直接には、日本での師のひとりであった阿部良雄が、君にはソルボンヌ（パリ第四大学）はあわないから、ロードのほうがよいだろう、と紹介してくれた、という経緯がある。リュクサンブール公園南のミシュレ街にあったジャック・ドゥッセ美術史研究所の三階に院生面会室があり、十月であったか、指定日の午後

に出かけてみると、待合室は大繁盛の病院も顔負けの混雑ぶり。数時間待たされてようやく面会の順番がやってくる。ロードは当時六十歳を超えたばかりだったが、巨漢ながら年齢の割に老けてみえた。当時の博士課程ではDEA取得のために三名の教員の授業を取る規定となっていた。教室主任だったマルク・ルボに並んで、ロードはパリ第七大学の気鋭の *maître assistant* (准教授に相等) を推薦した。それがアンヌ＝マリイ・クリスタンだった。

中央に高い塔が聳え、その周囲にピロティ構造の校舎が整然と並ぶジュシュー校の授業に出席してみると、若々しく颯爽とした女性の姿があった。白いシャツに黒のスラックス、そして頭髪は頭上に巻いて、というスタイルは、終生かわらない。講義の話ぶりは、特有の長い文体で、最初はついてゆくのには苦勞した記憶がある。ジャック・デリダのエクリチュール概念にたいして犀利な批判が展開されていた。セミナーで当方は大正版画の展開と、浮世絵版画の分業とは異なる自画・自刻・自摺のイデオロギーを分析した。これはその後、アンヌ＝マリイも親しかった、国立図書館版画部のミッシェル・ムロ室長の「尽力もあり、『版画新報』(Nouvelles de l'estampe) 誌に掲載された。数年後、鈴木重三先生が調査のためパリにお見えになった。ギメ美術館での講演は鈴木春信の見立てを縦横に分析したもので、絵と文字との関係についても目を啓かれた。これにはアンヌ＝マリイも聴講してくれたが、当方は通訳を務めた関係でこの講演に基づいた論文を執筆し、これは当時パリ第一大学の学生たちが発刊していた『書一視』(*Écrit-vu*) 誌に掲載された。

ジャン・ロードのセミナーでは透視図法が江戸絵画をいかに変容させ、それが逆にいかに印象派などの空間意識の変貌につながったかを発表した。その乱雑なタイプ原稿をピエール・ブルデューに送ると、さっそく『社会科学研究論叢』(*Actes de la recherche en sciences sociales*) への掲載を求められた。ロードは喜んで賛同してくれたが、コレージュ・ド・フランスの教員室になにかの用事で呼ばれた折りに、アンドレ・シャステルにその件を述べると、ブルデューなんかと、同僚の悪口に加えてお小言まで頂戴した。

アンヌ＝マリイは一九八二年には博士論文に基づく『フロマンタン、空間を語る人』(*Fromentin, contenu d'espace*) を刊行する。アルジェリアを描いた画家への彼女の関心が、その出自にかかわることは、当時は知らなかった。ただサハラ沙漠やマグレブの人々の鷹狩を描く画家でもあれば、オランダ絵画を論ずる文筆家でもあった人物を研究対象とする問題意識は、当時流行の記号学研究のある側面をも反映していた。初対面のロードに当方はその場の口から出まかせで、印象派の批評家であり、マネの伝記作家にして日本通を誇ったテオドル・デュレを、博士論文の課題として提案した。ロードがアンヌ＝マリイを推薦してくれたのも、きわめて適切な人選だったことになる。

とはいえ、この主題には酷く手古摺てこずった。以下、私事にわたり恐縮至極だが、本論集の扱う「テキストとイメージ」に免じて、脱線をお許し頂くなら——デュレの印象派列伝やクルベからルノワール、ファン・ゴッホに至る画家の伝記の類を漫然と読んでみても、平凡な常識が綴られているに過ぎないという印象が一向に拭えない。だが調査を進めるにつれ、美術批評はあくまで後年の余技であり、第二帝政期にはエミール・ゾラとの親交の傍ら、共和派の政治新聞に記事を量産し、第三共和政期を迎えると、世紀末まで在野の歴史家としてパリ・コミュニケーションをめぐる膨大な著作群をものして、詩人マラルメの称賛を得ていた人物と分かつてくる。平々凡々と見えたそのマネや印象派弁護の論調にこそ、美学を政治から自律させるといふ別次元の政治的課題が隠されていた——と思ひ当たるには、優に五年の歳月を要した。だがそれより何より、当時はまだ手動タイプライターしかない時代である。論文を活字にするには、下手な手書き原稿を最低三度は打ち直す手間が必要だった。新制度への移行も重なり、これではとても博士論文を仕上げるのは無理、と諦めていた。八二年秋にDEAを取得すると、後はおつぱら図書館通いで資料を書写していたが、作業は遅々として進まない。

そうこうするうちに、長らく病床にあった奥方を前年に亡くしていたロードが、一九八四年秋、肺癌に倒れ、二月一九日に六二歳で世を去る。同窓の留学生たちは、後ろ盾を失い、散り散りになった。結局その後任に

ジャン・クロード・レーベンシュテインが着任するのは、八六年秋を待たねばならなかったかと記憶する。後任の引き受け教員も見つからぬまま、ここで留学を切り上げて帰国するかも考えたが、そんな極東からの留学生を救出してくれたのがアンヌ・マリイだった。ちょうど運よく正教授に昇進した彼女の初期の博士課程学生として、当方は八八年まで欧州逗留を続けることとなる。教授に着任したアンヌ・マリイは、持ち前の面倒見のよさと組織力を発揮して、ジュシュー校中央塔の最上層部に「エクリチュール及びイメージ研究センター」(Centre d'étude de l'écriture et de l'image)の本部を設置する。眼下一望、すばらしく眺めの良い部屋であり、当方も何度かここを会場として、日本人留学生を集めた研究会を開催した。センターの会議ではセゴレーヌ・ルメンやペアトリス・フランクルなどが同窓だった。チェン・カネヒサによる東アジアの広告視覚媒体の記号論的分析が書籍になったのもこの頃である。

アンヌ・マリイが吉田城・典子夫妻の招きで京都に滞在したのは、これに続く時期のこと。当方は「鬼の居ぬ間の洗濯」などと称して、指導教員の不在を良いことに不良を決め込んだ。アンヌ・マリイの京都滞在記は紐綴りの造本に、文字は石川九楊。最初はその奇怪な「écriture」に首を捻ったらしいが、仄聞するところでは、納得の行かぬ彼女に稲賀が九楊の業績を縷縷説明したのでそうな。指導教授の優雅な古都滞在とは裏腹に、不肖の弟子はその間、八年のパリ滞在で七度の引越しを余儀なくされた。末期の引越しにはアンヌ・マリイを哑然とさせる小説顔負けの樁事も発生したのだが、この件はまた別の機会に――。

八六年であったか、初代の欧文ワープロが英国のアムストラッドから発売された。価格は六七〇〇フランだったか、当時のパリ―東京格安往復航空券の値段に匹敵した。だがこれがないと博士論文の完成など、とてもおぼつかない。印字は三六ドット、文末で「検索」を掛けると無限後方まで探しにいらしてしまつて「ピー」という警戒音とともに機械が停止するという代物だったが、日本の山陽電機製のミニ・フロッピー二十数枚を費やし、当方の千頁におよぶ博論作成を終えると、本機は現在名古屋大学に勤務する松澤和宏さんにお譲りして、

彼の膨大なるフローベール手稿の生成研究にも役立てた筈。このボンコツを騙しましたし、都合三カ月で博士論文を文字通り「でつちあげた」。生前直接に聞くことはなかったが、なんでもアンヌ・マリイは後続の日本からの留学生たちに、イナガの粗製乱造博士論文作成の「速さ」を何度となく語り草にしていたという。たしかに毎日十枚書いて三カ月続ければ、分量だけは九百枚に到達する計算である。この拙速の裏には八八年の初頭あたりで、東大駒場キャンパスの助手に四月に就任せよとの話が突如浮上した、という事情もあった。今日の過酷なる就職事情からは想像も許されない「古き良き」(?)、バブル時代の逸話である。

今にしてみれば我ながら呆れはてた行状だが、当時の欧州学会事情を伝える縁として、書き留めておく。件の不良学生は博士論文の完成もおぼつかないままに、一九八七年には随分と「欧内雄飛」を楽しんだ。六月にベルギーのルーヴァン新大学で開催されたトランススクルトウラ(Transcultura)の第一回会議では、ウンベル・エーコほかの仲間と、その後世界各地を回ることになるお付き合いの端緒を得た。また冬にはヴェネチア大学で「日本再考」(Rethinking Japan)という大規模な学会がアドリアーノ・ボスカロの主導で開催され、ここでは、ドナルド・キーン先生の司会のもと、博士論文の一部を英文で発表した。イルメラ・ヒジャ・キルシユネライトやリヴィア・モネの知遇を得たのは、この折りである。京都から戻ったアンヌ・マリイは、当方の放蕩ぶりに、内心不安や危惧を抱きつつも、そうした会合への参加を率直に喜んでくれた。

だがここではアムステルダムでの経験に的を絞りたい。自由大学のキベディ・ベルガ教授から、面識もないのに見事な墨蹟の丁寧な書簡が届く。読んでみると「言葉と映像」(Word and Image)第一回国際シンポジウムへの招聘であった。事情もわからず参加発表の手続きを済ませると、アンヌ・マリイも参加することが判明した。ベルガさんやリヴィア・モネのグループの人々とも馬が合い、副会長に推薦された彼女は、めずらしく無邪気にはしゃいでいた。当方は、といえば、拙文発表の後でノーマン・ブライソンから声を掛けられた。まだルイ・マランも健在で、その悪文とは対極の巧みな弁舌でフォンテーヌブロー派の絵画を分析したのに、舌を

巻いた覚えがある。パリ第七大学の一向は、会議終了後大慌てで鉄道駅に向かう羽目となり、僭越ながら指導教授のお召し物の荷造りまでお手伝いさせて頂いた。中央駅にむかう車道を、信号無視でハイヒールのまま疾走した彼女の後ろ姿が、いまでも脳裏にしかと焼き付いている。

駒場の助手着任の数カ月後、博士論文審査に漕ぎつけた。ベルナル・フランクを主査、ジュヌヴィエーヴ・ラカンブル夫人とジャン・ポール・ブイヨンに、折からジャポニスム展の講演のため来訪中の平川祐弘先生を含めた豪華な審査団が構成された。旧知のブイヨンとは波乱もあり、フランク先生からは悪文を窺われ、平川先生を哑然とさせる無茶な答弁もあったが、指導主任の采配もあつてか、事なきを得た（のか否か、舞台裏は守秘義務の彼方である）。

およそ従順な優等生からは程遠い札付き学生だったが、これが、良きにつけ悪きにつけ前例（のひとつ）となったものか、その後、クリスタン教授のもとには、日本からも優秀な学生が続々と訪れた。その中には、イナガが仲介したとの記憶をお持ちの方も何人かおられるのだが、当の本人は、不憫なことに、なにひとつ覚えていない。またかれらは、本人も知らない「某氏」奇行の逸話を、彼女からいろいろと聞かされもしたらしい。

地下鉄ゴブラン駅の向かいの十三区のアパート兼書齋に招かれた方も少なくあるまい。若き日の高等師範学校時代に自らデザインした、少女時代のトンボ眼鏡姿の自画像入りポスターも懐かしいが、それを玄関で眼にした方も多いことだろう。今や、往時茫茫——。二〇一三年初夏、オートゼチュード・コレージュ・ド・フランス Hautes études-College de France で日本建築と空間に関する連続講義をニコラ・フィエーヴェから依頼された折りも、クリスタン名誉教授は、毎回出席して熱心に質疑に加わってくださった。その折に地下鉄駅前の行き付けのカフェで夕食を共にしたのが、今生最後の機会となった。若々しいままの容姿だったが、わずかに瘦せられたのが気になった。

*

訃報は坂井セシルさんから不意に届いた。月並みだが、突然の死に言葉を失った。

往年の留学生活の断片を僅かばかり繋ぎ合わせ、教授の在りし日の姿を遙かに偲びたい。

* 本稿は元来、本論文集の母体となった研究会の最後に、求めに応じて即興で述べた追憶に由来する。その一部をあらためて文字に起こしたが、もとより極めて身勝手な私的回想の断片に過ぎない。今回、編者より特段のご所望があり、まことに僭越かつ不躰ながら、ここに本書の「あとがき」に代えて収録して頂くこととなった。はなはだ破格な行文ながら、アンヌ・マリ・クリスタン教授の最初期のひとりの日本人学生の素行を通して、当時の世相の一端を窺う一助ともなるならば幸いである。思い返せば、よくもこんな不埒な学生を最後まで指導してくださったものと、あらためて感嘆する。掲載に至る事情をいささか申し述べ、読者のご海容とご寛恕に甘んじたい。

(二〇一七年十一月二十一日追記)

テキストとイメージ——アンヌ・マリ・クリスタンへのオマージュ

二〇一八年六月二〇日第一版第一刷印刷 二〇一八年六月三〇日第一版第一刷発行

編者——マリアンヌ・シモン^{II}及川

執筆者——吉田典子＋千葉文夫＋寺田寅彦＋森田直子＋北村陽子＋吉村和明＋

谷川多佳子＋ドウ・ユンジュン＋ヤン・パテンス＋稲賀繁美

装幀者——宗利淳一

発行者——鈴木宏

発行所——株式会社水声社

東京都文京区小石川二一七一五 郵便番号一一二〇〇〇二

電話〇三—三八一八—六〇四〇 FAX〇三—三八一八—二四三七

〔編集部〕横浜市港北区新吉田東一七七七一七 郵便番号二三三〇〇五八

電話〇四五—七一七—五三五六 FAX〇四五—七一七—五三五七

郵便振替〇〇—一八〇—四—六五四—一〇〇

URL: <http://www.suisetsha.net>

印刷・製本——モリモト印刷

ISBN978-4-8010-0352-1

乱丁・落丁本はお取り替えます。